

『父の心、子の心』(マラキ書 3章16節-4章6節) 2020.11.22.

<はじめに> 冬を前に感染拡大の第三波が予測通りに顕著になって来ました。その一因に「コロナ疲れ」と言われます。私たちは大切だと教えられたことを、丁寧に心掛けることが苦手です。倦怠感を抱き、心を伴わない形式に流れる人たちは、いつでもあります。マラキの時代もそうでした。

I 倦み疲れ怠ける人たち

① マラキ書と時代背景

マラキ(=主の使者)は、BC5世紀終わり、ネヘミヤと同時期に活動した預言者と見られます。バビロン捕囚から帰還したユダヤ人は、神殿を再建してイスラエル再興を期したのですが、思い通りに事は進まず、収穫も乏しく、主への礼拝も形式的になって行きました。

② 冷めた言葉

本書は主と民のやり取りで綴られています。不具な物を主に献げ(1章)、妻を離縁して異邦の女をめぐり(2章)、不義・不正も横行(3章)していました。主の指摘に民が「どのように」「何と」(1:2,6,7,2:17,3:7,8,13)と返すと、主は「あなたがたは言う」と本音を暴露されます。

③ 記憶の書が記された(3:16-18)

主の厳しい言葉に失望してはなりません。主を恐れ、主の御名を尊ぶ者たちを忘れ、見捨てられたのではないからです(16)。主のあわれみは絶えることなく注がれています。主は「彼らはわたしのもの、宝となる」(17)と言われ、善悪をさばかれ、公にされます(18)。

II その日が来る(4:1-4)

① 「その日」とは

預言書でよく見る表現で、人の世に主なる神が顕現され、著しく働かれるその時を指します。究極的にはこの世の終末を指していて、その時すべてが成就しますが、その手前にある幾つかの時も重ね見えています。

② 二面性

その日について、対照的な局面が描かれています。すべて高ぶる者、悪を行う者には焼き尽くすさばきの時となりますが、主の名を恐れる者には義の太陽・癒しの翼(2)です。同じ主の御顔も、見る者の実質と主との関係によって、その印象は大きく異なるからです。

③ 秩序の神

3:14-15 は倦怠感を抱く信仰者の本音です。神は信頼に足らない方とし、その律法と言葉を後ろに投げ捨てると、空しさと混沌・混乱に包まれます。それでも主は秩序の神です。その律法・掟・定めを彼らの前に再度差し出し、「覚えよ」(4)と迫られます。

III 父の心を子に(4:5-6)

① どちらが先か

どうして「子の心をその父に向けさせる」方が後なのか、むしろ先ではないか？と問われたことがあります。父は神、子は人であるなら、父に向けて心を翻し、悔い改めて立ち返るべきは人なのは、という疑問です。どう思いますか。

② まず父の心から

確かに人は神に立ち返るべきです。しかし、悲しいかな、人から神に近づき、神に受け入れてもらえる状況ではありません。それほど神と人の距離は遠く隔たっていて、間に立ち塞がる罪の裂け目は大きいのです。だから、まず御心を罪人に向けなければなりません。

③ 恵み・あわれみの実現(ヨハネ 1:17)

それこそ神の恵み・あわれみです。それは、大いなる恐るべき日が来る前に預言者を遣わし、神の恵みとあわれみが実現したことを告げ知らせ、人々に悔い改めを促します。パブテスマのヨハネです。そして、恵みとまことはイエス・キリストによって実現します。

<おわりに> クリスマスが一月後に近づいて来ました。神の恵みとあわれみはもう実現しています。主の到来の終わりの時(6)も近づいています。今は恵みの時、今は救いの日です(IIコリント 6:2)。私たちの心を主に向けて、立ち返ろうではありませんか。(H.M.)